

保存則に即した数値計算手法

—構造保存数値解法の背景・考え方・近年の進展—

宮武 勇登 (名古屋大学)

研究会

「計算物質科学における時空間アップスケーリングと数値手法」

- ① はじめに（背景）
- ② 構造保存数値解法の考え方
- ③ 日本における構造保存数値解法の研究（合成解法と離散変分法）
- ④ 今後の展望

① はじめに（背景）

② 構造保存数値解法の考え方

③ 日本における構造保存数値解法の研究（合成解法と離散変分法）

④ 今後の展望

ODE $\dot{y} = f(y)$ の数値解法

Euler法, Runge-Kutta法, 線形多段解法...(19世紀から研究)

→ 実際のapplicationではしばしば不安定

Störmer (1907)

$$\ddot{q} = -\nabla V(q) \quad \Leftrightarrow \quad \frac{d}{dt} \begin{bmatrix} q \\ p \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} p \\ -\nabla V(q) \end{bmatrix}$$

Störmer法の時間発展アルゴリズム : $(q_n, p_n) \mapsto (q_{n+1}, p_{n+1})$

$$q_{n+1/2} = q_n + \frac{h}{2} p_n$$

$$p_{n+1} = p_n - h \nabla V(q_{n+1/2})$$

$$q_{n+1} = q_{n+1/2} + \frac{h}{2} p_{n+1}$$

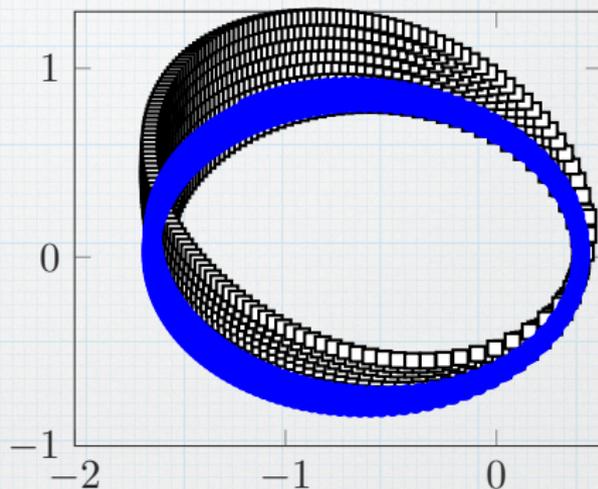
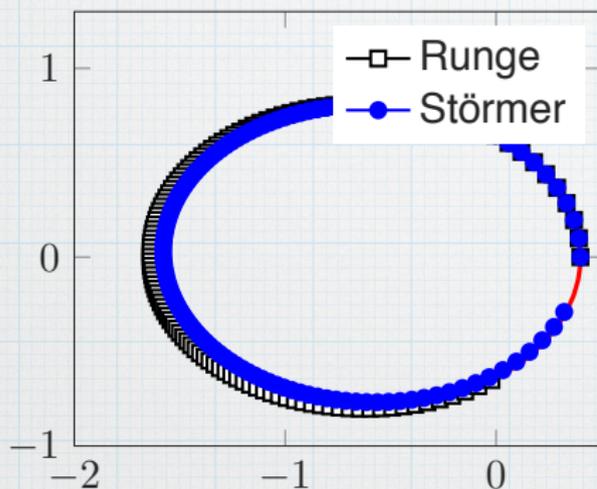
Kepler問題：数値解の時間発展

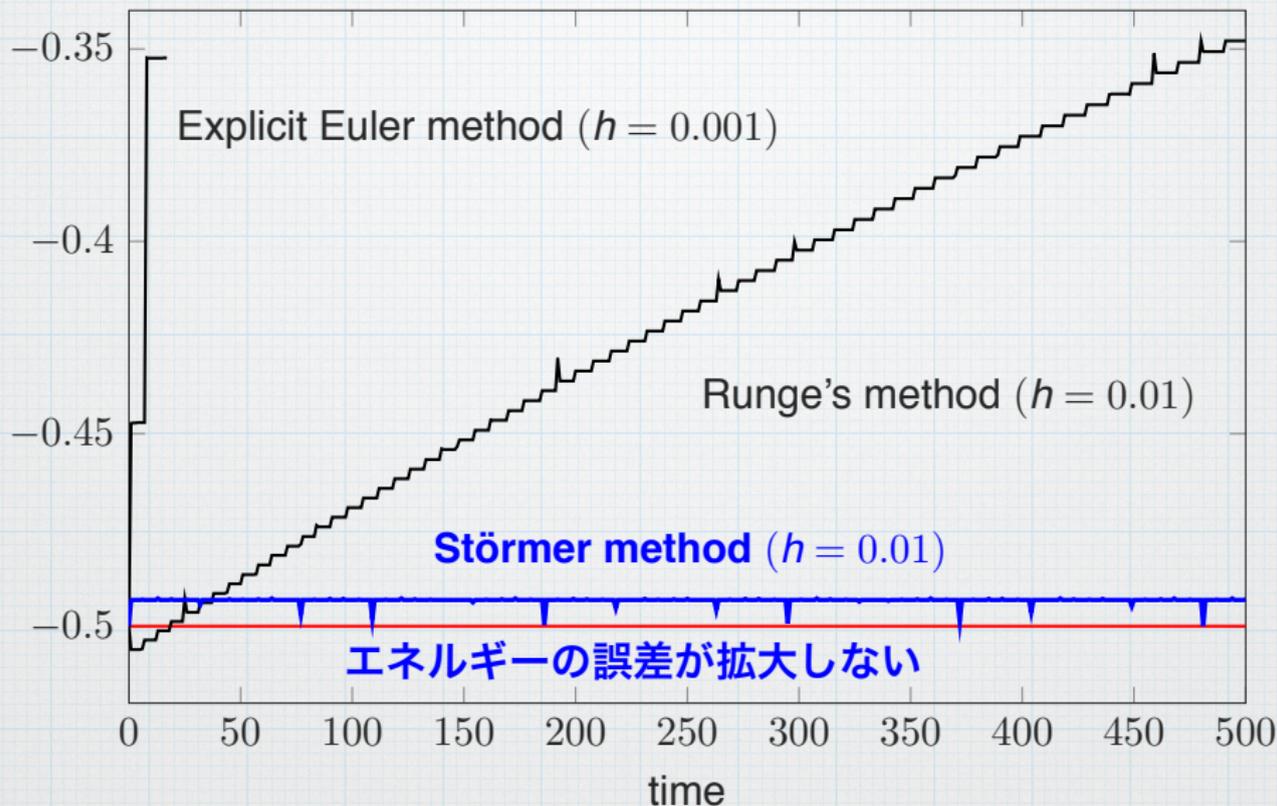
[4/24]

Keplerの二体問題（厳密解は楕円軌道）に対して、
Rungeの方法と**Störmer法**を比較

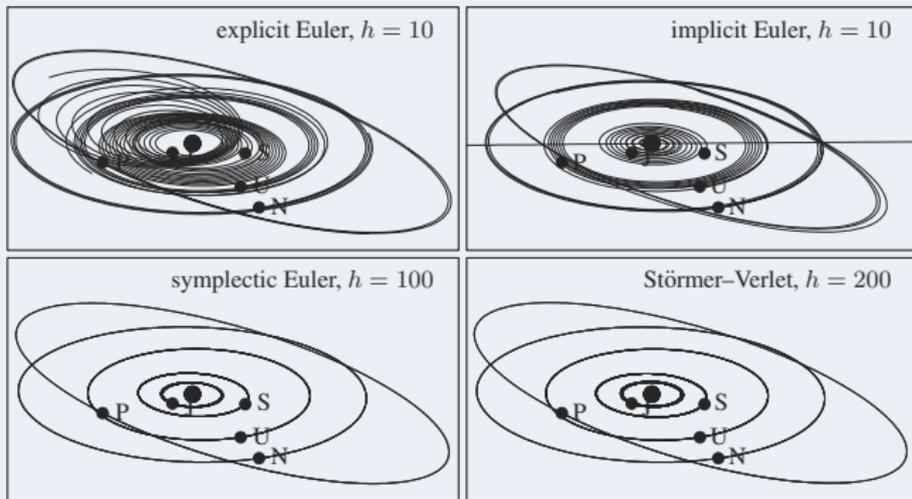
$h = 0.05$, 120 steps

$h = 0.05$, 1200 steps





Outer solar system

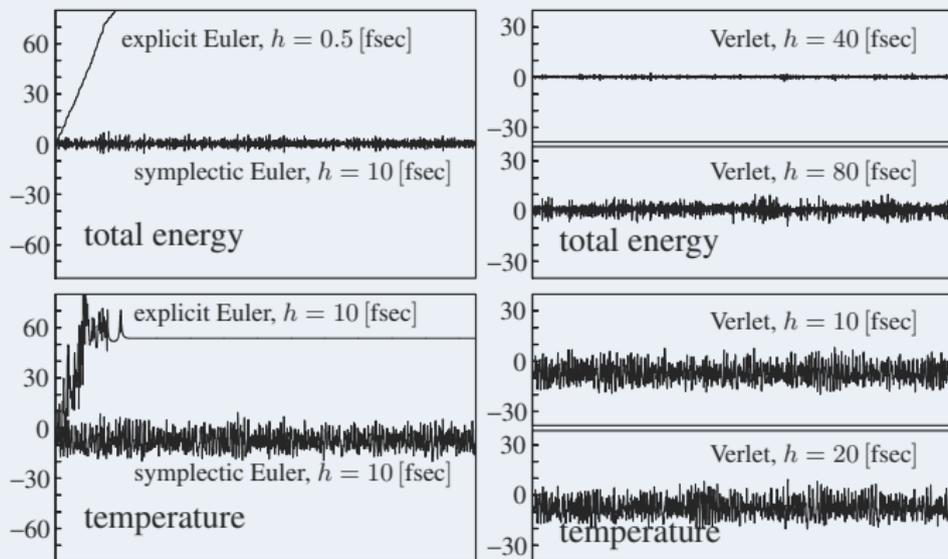


(from Hairer, Lubich, and Wanner, 2006)

Verlet (1967)

Verlet法 = Störmer法 = Störmer-Verlet法
 (分子動力学) (天文学) (数値解析学)

分子動力学 (argon crystal)



(from Hairer, Lubich, and Wanner, 2006)

- Störmer-Verlet法は汎用解法？

→ **NO** (任意のODEには適用できない)

- Störmer-Verlet法は専用解法？

→ 開発当初は、

但し、次のタイプのHamilton系であれば分野を問わず適用可能

$$\frac{d}{dt} \begin{bmatrix} q \\ p \end{bmatrix} = \mathcal{J} \nabla H(q, p), \quad H(q, p) = T(p) + U(q), \quad \mathcal{J} = \begin{bmatrix} 0 & I \\ -I & 0 \end{bmatrix}$$

SV法は (separableな) Hamilton系に対して汎用解法を凌ぐ

∴ Hamilton系のsymplectic性を厳密に再現している

理論

応用

汎用解法

(e.g. Runge–Kutta法)

構造保存数値解法

専用解法

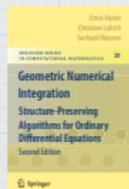
(e.g. Störmer法)

構造保存数値解法 (1980年代～)

- 対象の微分方程式クラスを限定
例：Hamilton系，勾配系
- 何らかの性質・構造を再現するように数値解法を設計
例：(Hamilton系の) symplectic性，エネルギー保存性
→ その分，汎用解法より優れている（ことが期待される）
- Störmer–Verlet法は構造保存数値解法の一つ (symplectic解法)

定番教科書 (の一つ)

Hairer, Wanner, Lubich: Geometric Numerical Integration, 2006.



① はじめに (背景)

② 構造保存数値解法の考え方

③ 日本における構造保存数値解法の研究 (合成解法と離散変分法)

④ 今後の展望

Hamilton系

$$\frac{d}{dt}y = \mathcal{J}\nabla H(y), \quad y(t_0) = y_0 \in \mathbb{R}^{2d} \quad \left(J = \begin{bmatrix} 0 & I \\ -I & 0 \end{bmatrix} \right)$$

定理 (symplectic性)

Hamilton系のフロア $\phi_{\Delta t}: \mathbb{R}^{2d} \ni y(t) \mapsto y(t + \Delta t) \in \mathbb{R}^{2d}$ は symplectic写像

$$\left(\frac{\partial \phi_{\Delta t}}{\partial y} \right)^\top J^{-1} \left(\frac{\partial \phi_{\Delta t}}{\partial y} \right) = J^{-1}.$$

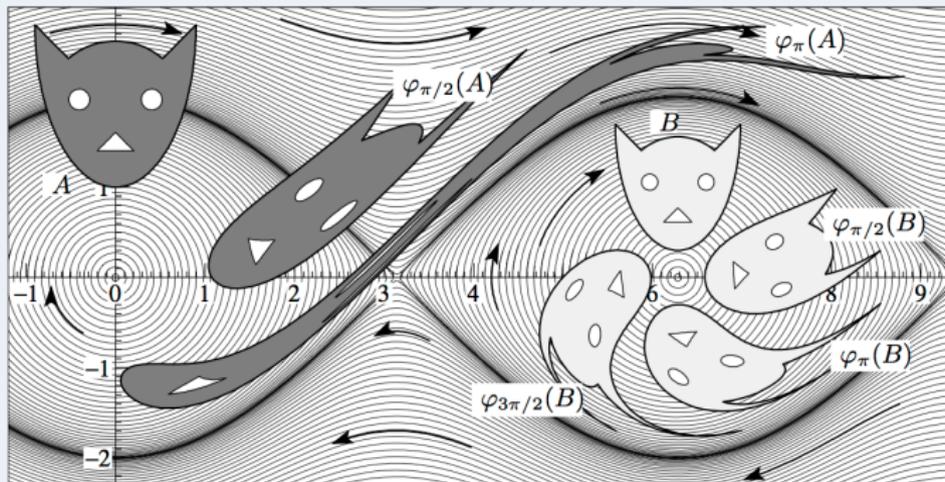
【同値な表現 (微分形式)】

$y = (q, p)^\top$ と分けたとき, $dq \wedge dp = \text{const.}$

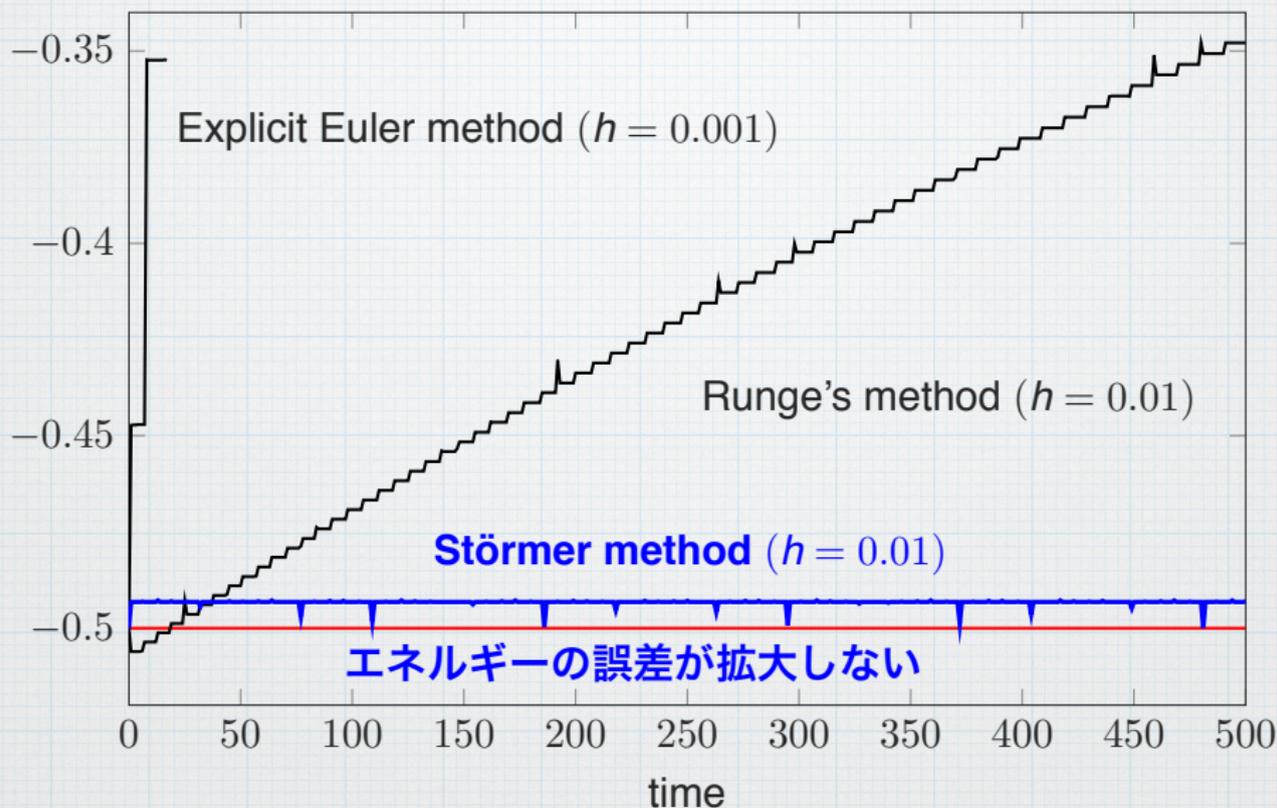
symplectic数值解法

離散時間発展写像 $y_n \mapsto y_{n+1}$ が symplectic となる数值解法

(例) 中点則, **Störmer–Verlet法**, Gauss–Runge–Kutta法
(NLS方程式に対する) splitting解法



(from Hairer, Lubich, and Wanner, 2006)



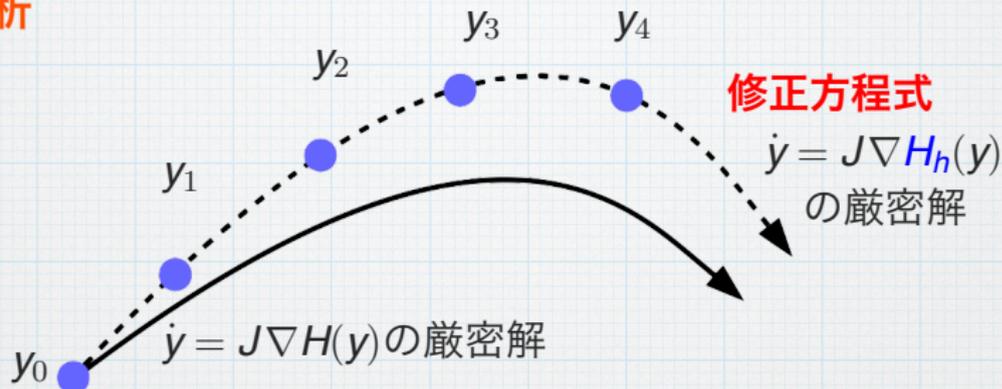
なぜ定性的に良い数値解が得られるのか？

[14/24]

数値実験の考察

エネルギーの誤差がバウンドされている（拡大しない）

後退誤差解析



p 次のsymplectic解法に対して, $H_h(y) = H(y) + h^p H_p(y) + \dots$
 $\therefore H(y_n) = H(y_0) + \mathcal{O}(h^p)$

良い長時間挙動の本質

Symplectic解法はハミルトン系をハミルトン系で近似

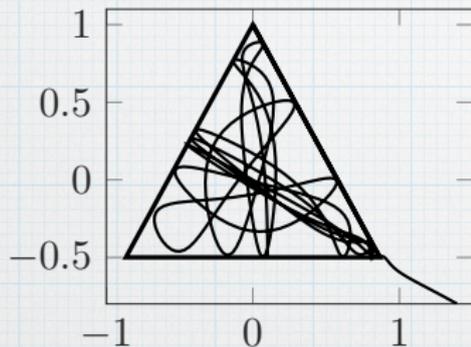
cf. HLW 06: Chap. IX.3, Theorem 3.1

Hamilton系に対するその他の構造保存数値解法 [15/24]

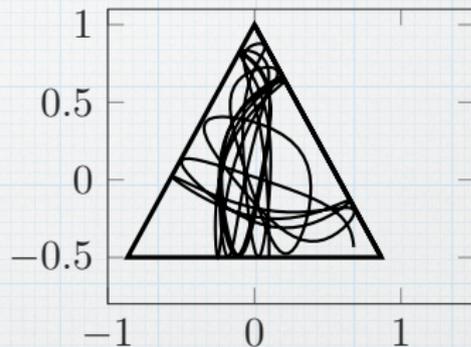
Hamilton系 $\frac{d}{dt}y = \mathcal{J}\nabla H(y)$ の他の性質

- エネルギー保存性 $H(y) = \text{const.}$ → **エネルギー保存解法**
(例) Hénon–Heiles系 (エネルギーの僅かなズレが致命的)

Symplectic Euler method



Average vector field method



並列エネルギー保存解法 (M.–Butcher, SIAM J. Numer. Anal. [2006])
(NLS方程式に対して性能評価: 山本先生, 星先生, 井町さん, 工藤さん)

- 体積保存性 → **体積保存解法**

複数の性質を再現できないだろうか？

[16/24]

symplectic性 + エネルギー保存性？

特殊ケースを除いて**不可能**

(Zhong–Marsden, Phys. Lett. A [1988], Chartier et al., Numer. Math. [2006])

∴もし可能ならば、解軌道を厳密に再現できる

→ conjugate/pseudo symplectic解法
(symplectic性の制約を少し弱めた解法)

複数の保存量を再現？

ODE

Minesaki–Nakamura (Phys. Lett. A [2002]),
Dahlby–Owren–Yaguchi (J. Phys. A [2011])

PDE

McLaren–M.–Quispel 2016

- ① はじめに（背景）
- ② 構造保存数値解法の考え方
- ③ 日本における構造保存数値解法の研究（合成解法と離散変分法）**
- ④ 今後の展望

精度を上げるには？

例えばStörmer-Verlet法は2次精度解法

→ 高精度化できないか？

$\Phi_h : \mathbb{R}^N \rightarrow \mathbb{R}^N$: 1ステップ後の数値解を返す写像 (symplectic解法)

合成解法 (composition method) : 写像の合成

$$\Psi_h := \Phi_{\gamma_s h} \circ \cdots \circ \Phi_{\gamma_1 h} \quad (\gamma_1 + \cdots + \gamma_s = 1)$$

例 : $\Psi_h = \Phi_{\frac{1}{2}h} \circ \Phi_{\frac{1}{2}h}$ (刻み幅を半分にしただけ・次数は同じ)

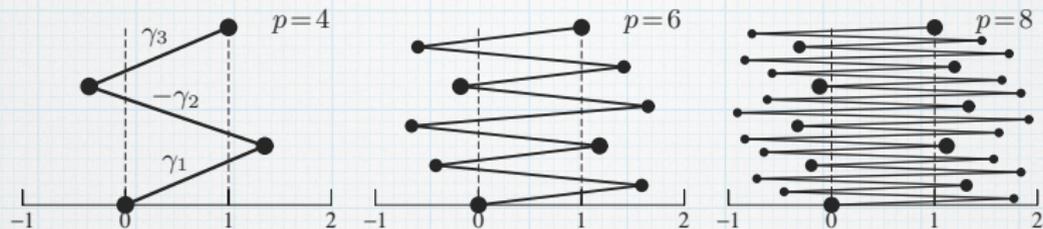
$0 < \gamma_i < 1$ とすれば, Φ_h よりも Ψ_h の方が数値解の誤差は小さい

やりたいこと

Find $\gamma_1, \dots, \gamma_s,$

s.t. Ψ_h の次数 $>$ Φ_h の次数, Ψ_h も symplectic 解法

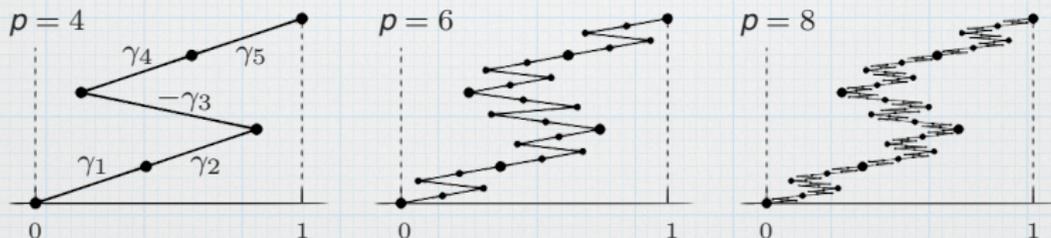
Yoshidaのtriple jump (Yoshida, Phys. Lett. A [1990])



(Hairer-Lubich-Wanner 2006より抜粋)

問題点：大きな負の刻み幅を含む
(分子動力学や勾配系の数値計算で問題)

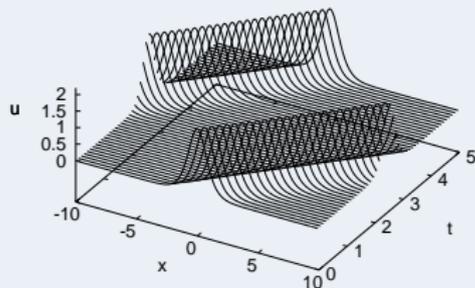
Suzukiのfractal (Suzuki, Phys. Lett. A [1990])



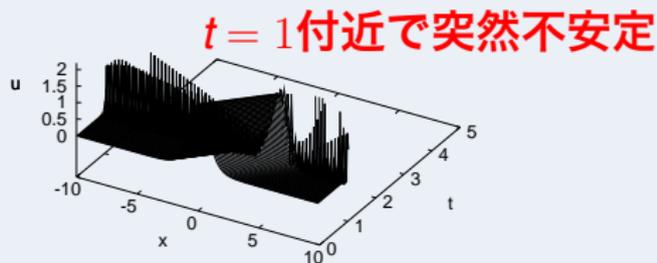
浅水波を記述するKdV方程式：

$$\frac{\partial u}{\partial t} + 6u \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial^3 u}{\partial x^3} = 0, \quad x \in \mathbb{T}, t > 0.$$

エネルギー保存則： $\frac{d}{dt} \mathcal{H}[u] = 0, \quad \mathcal{H}[u] := \int_{\mathbb{T}} \left(u^3 - \frac{u_x^2}{2} \right) dx$



エネルギー保存スキーム
(Furihata 1999)
 $\Delta x = 0.1, \Delta t = 1/10$



4次のRunge-Kuttaスキーム
(空間離散化は左と同じ)
 $\Delta x = 0.1, \Delta t = 1/915$

離散変分法

変分構造を持つPDE

$$u_t = \mathcal{D} \frac{\delta \mathcal{H}}{\delta u}, \quad \mathcal{H}[u] = \int H(u, u_x, \dots) dx$$

- \mathcal{D} : 歪対称 \Rightarrow エネルギー保存則 $\frac{d}{dt} \mathcal{H} = 0$
(例) KdV, Nonlinear Schrödinger, Klein-Gordon
- \mathcal{D} : 半不定値 \Rightarrow エネルギー散逸則 $\frac{d}{dt} \mathcal{H} \leq 0$
(例) Heat, Allen-Cahn, Cahn-Hilliard, Ginzburg-Landau

離散変分法 (1990年代中頃～)

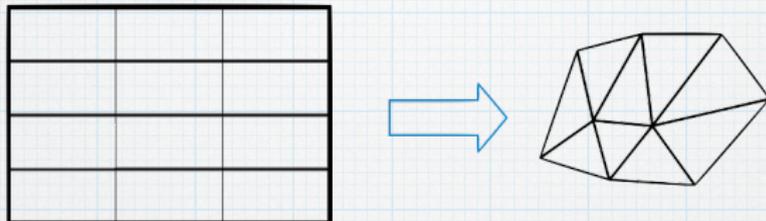
変分構造を持つPDEに対して保存型/散逸型スキームを導出する手法

- 降旗-森により提案
- 日本を中心に発展 (\rightarrow 次スライド)

離散変分法の近年の発展

高次元問題への対応

従来の離散変分法：差分法，等間隔メッシュにのみ対応
 →複雑な多次元領域を扱うため，**不等間隔メッシュ**を導入



- **有限要素法** (Matsuo [2008])
 離散変分法よりも適用範囲が狭い
 → 種々の制約の解除，不連続Galerkin法への拡張（高精度化）
 (M.-Matsuo [2014]等)
- **mapping methods** (Yaguchi et al. [2010] 等)

- ① はじめに（背景）
- ② 構造保存数値解法の考え方
- ③ 日本における構造保存数値解法の研究（合成解法と離散変分法）
- ④ 今後の展望

大規模問題の需要・構造保存数値解法の多くは陰解法

- 並列計算・並列性のある数値解法の開発
- モデル縮減（データの利用・方程式のサイズを小さく）
（→ 本日の松尾先生のご講演）

個人的興味

応用分野で

- 優れた/よく使われている「専用解法」
- 数値解法の性能を評価する物理/数理的指標
- 必ずしもきれいな構造を持たない（けれど重要な）方程式/問題

その他

- 確率微分方程式・非整数階微分方程式
- 数値線形代数との連携
- データ同化などへの応用の可能性